

方定煥の東京留学 —— 李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』を読む A Study of Bang Jeong-hwan and His Studying abroad in Tokyo

大竹聖美

Modern Korean children's literature began from Bang Jeong-hwan's study abroad in Tokyo. However, his staying in Tokyo was not aimed at children's literature from the beginning. He arrived as a correspondent of the comprehensive magazine "Gae-Byok" just published at the time. He started not only activities as a correspondent reporter but also the Youth Association of Chondogyo Tokyo Branch and fulfilled the heavy responsibility as the first president. "Gae-Byok" was also a magazine representative of the Korean literary at that time, but also a magazine of the Chondogyo. Bang Jeong-hwan's study abroad was impossible without Chondogyo's support. The existence of Chondogyo at the starting point of Korean children's literature was very important.

キーワード：朝鮮 韓国 児童文学 児童文化 植民地

1. はじめに

方定煥は、1919年3月1日の独立運動に関わった後、しばらくして東京に留学している。方定煥の東京留学は、方定煥の個人史としての意味だけでなく、韓国児童文学の創生期を考える場合にも非常に重要な意味を持っている。

方定煥が書いた最初の童話集であり、韓国児童文学史の出発点に数えられる『愛の贈り物(사랑의 선물)』(京城：開闢社、1922年7月7日)は、1921年末に留学先の東洋大学近くで書かれたものである。また、韓国初の本格的児童文芸誌であり、その後の韓国児童文学史を築く作家たちを輩出し、韓国の童話童謡の出発点となった作品が発表された『オリニ』誌も方定煥が1923年3月に創刊したもので、ここには当時東京で流行していた『赤い鳥』や『金の船』『金の星』などの児童文芸誌の影響が見られる。

本稿では、韓国児童文学の創生期を考える上で欠かすことのできない方定煥の東京留学について、韓国における先行研究(李相琴『小波・

方定煥の生涯——愛の贈り物』ソウル：ハンリム出版社、2005(이상금『소파 방정환의 생애—사랑의 선물』한림출판사))を精読しながら考察する。

2. 方定煥の渡日年月とその目的

韓国の子ども用の偉人伝には、必ず韓国近代の偉人として、独立運動家あるいは児童人権運動家、児童文学の父として方定煥が登場する。韓国の子どもの日は5月5日だが、方定煥が創設したことで有名な子どもの日(オリニナル)は、国を担う子どもたちへの愛情を確認し、子どもたちの明るい未来を思い描く国民の祝日として、現在も大切な日となっている。

そんな方定煥の伝記には、1919年の3・1運動後に東京へ行く方定煥が必ず描かれており、帰国後、『オリニ』誌を刊行し、子どもの日を創設し、児童人権運動のオリニ運動を行い、植民地支配下の朝鮮の人々を慰め希望を与えた偉業が書かれている。

しかしながら、実のところ、正確な渡日年月や留学の実態は長らく不正確なまま英雄的に語られていた部分が大きかった。

その不明確な部分を実証的な研究によって明らかにしたのは韓国の研究者李相琴（1930年広島生まれ、1945年韓国帰国、梨花女子大学名誉教授）である。まずは、1919年の独立運動直後ではない理由について、李相琴の先行研究を確認しておきたい。

小波がいつ日本に渡って行ったかに対する記録もいろいろだ。子どもの伝記を含んで、ある記録は3・1独立運動直後とか1919年年末という早期渡日説がある。しかしこれは非常に安易な発想だというほかない。およそ1年近く韓半島（朝鮮半島のこと…訳者注）のあちこちで万歳デモが続いている時だ。独立運動時、天道教の核心にあり、特に『独立新聞』事件で拘束されて取り調べも受けた重要な監視対象の小波を総督府がそのまま行きたい時にやすやすと行かせるというのは到底望めない実情だった。

総督府は1919年4月、警視總監令第3号「朝鮮人の旅行取り締まりに関する件」を公布して、朝鮮人の日本旅行を厳重に取り締まった。旅行をしようとするならまず居住地管轄警察署に旅行地と旅行目的を申告して、許可書を受けなければならなかった。特に留学生に対しては最も警戒したし、上の旅行許可書の他に留学生の住所、原籍、家族職業、財産報告、留学する学校名、本人の性質、経歴、主義、党派系統、信用程度および普段交際する人、通信者に至るまで詳細な身元照会を経なければならなかった。斉藤総督の融和政策で留学生規制が解けたのは1920年11月であり、その後、旅行規制が完全に廃止された時期は1922年だ。（1976年、阿部洋「解放前日本留学の史的展開過程とその特質」『韓』12）この

ような規制緩和により留学生数は急増する。参考までに、1919年当時678名だったが、1920年1,230名、1922年には3,222人に増えた。（李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』ソウル：ハンリム出版社、2005年、218頁）ⁱ

このように、1920年末、あるいは1922年になるまで、留学生の資格で日本に留学することは大変難しかったのである。しかしながら、韓国児童文学史の起点として知られ、当時実際に多く読まれたと言われる1922年7月刊行の方定煥の童話集『愛の贈り物 (사랑의 성물)』には、その前書きに「日本東京白山下にて」と留学先の東洋大学近くの地名が書かれていることから、方定煥は、留学生規制があった時期にすでに東京に行っていたことが明らかなのであった。この点について、李相琴は明快な回答を示している。

こんな渦中（留学生規制や独立運動家に対する厳しい監視…訳者注）に、小波は1920年9月中旬、日本に行った。まだ留学生規制が解ける前のことだ。どのようにして可能になったのだろうか。彼は開闢社特派員として行ったのだった。以後、小波が日本に滞在する名分は三種類あった。まずは、開闢社特派員、次に天道教青年会役員、三番目に東洋大学留学生だ。旅行許可書は開闢社特派員資格で申請したので警察も是非を論じることができなかったようである。（李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』ソウル：ハンリム出版社、2005年、218－219頁）ⁱⁱ

李相琴は、方定煥の渡日を、1920年9月中旬と推定している。その根拠は、『開闢』（1921.1.1第7号）の「月夜に故国を懐かしみ」という文章に記されていた日付けである。

小波が日本に行った時期を1920年9月中旬と推定したのは、「月夜に故国を懐かしみ」に、十日あまり前に東京に来たという文章の末尾に記載された日付け、9月28日から逆算するとそのくらいになるためだ。『天道教会月報』127号に苦学生と自称する又空（ウ・ゴン）という教会信者が9月14日に方君に会って握手を交わしたというから、これは確実だ。ウゴンの文によれば、引き続き16日夜に幾人かの天道教青年たちが方定煥と上野公園で会って、留学生中に信徒がどれくらいあるのか調査して報告することにした。（李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』ソウル：ハンリム出版社、2005年、247頁）ⁱⁱⁱ

1919年に3・1独立運動が起きた後、朝鮮総督府はこれまでの武断統治から文化統治に切り替え、言論や集会が容認されるようになった。1920年には、3月に『朝鮮日報』、4月に『東亜日報』、そして6月には『開闢』が創刊されており、韓国近代の代表的言論媒体が相次いで誕生した。新時代の始まりである。

方定煥も、1920年8月に刊行された『開闢』第3号に、「灯りをつける人（불켜는 이）」という翻訳詩を発表し、そこではじめて「オリニ（こども）」という新しい用語を用いている。これまでの朝鮮で使われたことのない、新しい感覚を表す「オリニ（어린이）」という造語である。従来から朝鮮では、子どものことを「児孩（アヘ）」「童蒙（ドンモン）」と表現していたが、方定煥は、ここではじめてハングル表記の純粹朝鮮語で「幼い人」の意味を持つ「オリニ」を名詞として使用したのである。

「灯りをつける人」は、童心主義児童文学の古典といえるロバート・ルイス・スティーブソン（Robert Louis Balfour Stevenson、1850～1894年）の『子どもの詩の園』（*A Child's Garden of Verses*, 1885）に収録されている *The Lamplighter* の翻訳である。筆者が他稿^{iv}で比

較検証したとおり、この詩は多分に方定煥の創作が付与された詩であること間違いがないが、方定煥自身「訳」と記していることと、詩の内容はまさにスティーブソンの *The Lamplighter* であることが明白であることから、方定煥はスティーブソン『子どもの詩の園』のような童心主義的な世界観に憧れ、そうした童心の主体を表す新しい表現として「オリニ」を使ったものと思われる。

ところで、この「オリニ」の新用語が初めて発表された舞台である『開闢』は、天道教を背景とする雑誌である。朝鮮文壇に開かれた代表的総合雑誌として文学史を飾るが、発行元は天道教であり、天道教の機関誌でもあった。そして、方定煥は、この新しい「オリニ」の詩を『開闢』に発表した後、同じく天道教特派員の資格で東京に行った。方定煥の東京行は、まずは天道教幹部としての事業の為であった。李相琴は次のように述べている。

この時から小波の主導で東京天道教青年会組織のための動きが始まる。また、又空の文は、年が変わった1月初めから朝鮮留学生が集まる所ごとに「天道教青年会東京支会発起」という広告がついてまわったし、7日には朴達成（パク・ダルソン）が東京に来たと言われている。先立って紹介した小波の「二役の新年」（1921年1月15日『天道教会月報』127号）にも、1月2日に受け取った朴達成の葉書にまもなく東京に来るという便りが伝えられていた。そして「教友、またひとりを迎えて」（1921年2月『天道教会月報』126号）にも朴達成を歓迎する文を書いている。したがって1921年年初から天道教青年会の核心役員小波と朴達成によって、東京支会の設立が進行されたことが分かる。（李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』ソウル：ハンリム出版社、2005年、248頁）^v

東京に行った方定煥が最初に行った仕事の一つは、「天道教青年会東京支会」の組織的な設立だった。もちろん方定煥一人でできる仕事ではなく、協力者たちがいた。なかでも重要だったのは、朴達成である。朴達成は李相琴によれば、次のような人物である。

朴達成は平安北道大田出身で1894年生まれだ。幼くして漢文数学を修め、11才から天道教教理講習所で修学し、そこで講師の役割もした。上京して、普成高等普通学校を出て、秦川郡天道教教区公選員をした後、天道教会月報社囑託として勤める。3・1独立運動後、天道教が青年会と開闢社を発足する時から中央役員として参加した後、開闢社の『婦人』編集、『新人間』主筆として活動する。彼の号は、春坡(チュンパ)であり、ペンネームとして茄子峰人を使った。彼の家は小波の家と近い斎洞であったし、開闢社と少年会で小波と生涯同志として仕事をするようになる。(李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』ソウル：ハンリム出版社、2005年、248頁)^{vi}

3. 天道教青年会東京支会初代会長として

方定煥が渡日してすぐに行った大きな仕事である「天道教青年会東京支会」設立はこのようにして方定煥の主導により進行した。その後の経緯は次のようである。

この後の発起会の詳しい経過は、朴達成の「東京にある天道教青年の現況を報告して」(1921年2月『天道教会月報』126号)に見られる。1月16日日曜日は天道教人が礼拝を行う侍日だ。東京での初の集会所が開かれた。場所は早稲田の旅館、早稲田鶴巻町302大扇館で、集まった人は、方定煥、金相根、李起貞、鄭重燮、李泰運、朴春燮、金光鉉、朴達成など10余人であったし、

午後1時定刻に侍日儀式と教会発展に対する討議を進行した。この集まりに先立って、方定煥は神田にある基督教青年会館に天道教集会を知らせる広告を張り出した。広告文は次のようだ。

天道教青年会東京支会設立に対して相談するので、天道教青年として東京に在留する諸氏は、某日某時某所(日時場所は別記したので略す)に来臨されたし。万一、事故にて未参加となられしは、住所姓名を会の場所に通知されたし。

布徳62年1月10日

天道教青年東京支会発起人

代表 方定煥
金相根
李起貞
鄭重燮
朴達成

かくして、当日集まった人員が10人余りで、住所声明を知らせた人が5、6人だった。この日討議されたことは教会信者の友情を厚くして、教理研究を徹底するために一定の場所で侍日儀式を持つようにすること、場所の問題は本会に後援を求めること、布教に関する件、下記講演に対することであり、5時に終わった。この日の場所は朴達成が泊まった旅館であったし、また何ヶ月か前に小波が東京に始めて来て早稲田近郊を涙をあふれさせながら徘徊し「月夜に故国を懐かしみ」を書いた、まさにその旅館である。多分天道教人がしばしば利用したところであったようだ。(李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』ソウル：ハンリム出版社、2005年、248～250頁)^{vii}

上記の李相琴の研究のとおり、方定煥は1920年9月半ばに天道教特派員として渡日し、東京早稲田の早稲田鶴巻町302の大扇館旅館に宿泊した。そして、1921年の1月16日日曜日には、同旅館にて天道教青年会東京支会設立のための最初の集まりを開いたのであった。続けて、李相琴は次のように述べる。

二回目の侍日集会は1月23日にあった。朴達成他7、8人の会員が群れを成して鶏林社へ向かう。鶏林社は、小波が家一軒を賃貸りして、共同で自炊を始めたところだ。11時にたどり着くから方、李、梁氏が礼卓に清水を迎えて待つところだった。李氏は李起貞であるようだ。侍日儀式の形を朴達成の文を通じて探ってみる。

「天師の前に感謝することを仰告し、志の通り成就させると各々宣誓した後、「侍天主 造化定 永世不亡 万事知」十三字を厳粛に三度唱えました。そして方定煥氏の人乃天主義に対する明快な講演と李起貞氏の東京に対する感想談があった後、また「神師靈氣我心定 無窮造化今日至」を七度唱えました。天徳頌^{viii}は経典がないため省略したので非常に申し訳なかった。式を閉じ、清水を分飲したので、お茶かあるいは白湯を飲む日本で、冷水をもって恐れ畏み直会するのは実に天道教式であることが明かである」

上の文を通じて小波の真剣な天道教の役割と姿勢をまた確認することになる。彼は単純な一般信者ではなく天道教指導者としての責任を全うしていた。天道教青年会東京支会が正式に創立総会を開いて方定煥を初代支会長として推戴したのはそれから20日後の2月13日だ。小波は天道教が日本に最初の一步となる重責をやすやすとや

り遂げたのだ。(李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』ソウル：ハンリム出版社、2005年、248～250頁)^{ix}

方定煥の東京滞在中の仕事として、天道教青年会東京支会の発足と初代会長の任務があった事実は、彼が渡日した最も本質的な意味を示していると言えるだろう。方定煥は東京で流行していた童話や児童文芸誌を見るために留学したのではなく、まずは天道教人として渡日したのである。その順番を忘れてはいけないだろう。

4. 開闢社特派員として

本質的に、天道教人としての渡日ではあったが、渡航目的として申請したのは、「開闢社特派員」である。1920年になって、『朝鮮日報』（1920年3月創刊）、『東亜日報』（1920年4月創刊）と言論媒体が容認される文化統治となつて、天道教が運営する開闢社もそうした時流に乗るかたちで1920年6月に総合雑誌『開闢』を創刊した。方定煥は『開闢』の執筆陣であつたし、記事を書く特派員として渡日の切符を手に入れたのだった。方定煥は渡日して早速、この「特派員」としての仕事も行っている。李相琴の先行研究を読んでみよう。

開闢社特派員として彼が遂行した最初の課題は、わが国最初の飛行士安昌男を取材して本国に紹介した仕事だ。小波と安昌男は微動普通学校同窓だ。小波は1910年に鷹同普通学校から微動普通学校2学年に編入したし、二才下の安昌男は1911年微動普通学校に入学した。小波の卒業は1913年、安昌男の卒業が1915年なので少なくとも2年間は同じ教場で過ごしかつた。彼らが個人的にどれくらい親しかつたのかは分からないが、安昌男のことを故国に紹介した後彼らはとても身近に接した。(1965年、「お父様が歩いていかれた道」『小波児童文学全集』)

小波が『開闢』7号（1921年1月号）に「月夜に故国を懐かしみ」をのせて、その文末に「秋夕（チュソク）翌々日に」という日付を記録している。これは陰暦8月17日で陽暦では9月28日だ。そして安昌男は『開闢』6号（1920年12月号）に「小栗飛行場で」を寄稿する。安昌男の文は執筆日時が「10月15日夜に」となっているので、上の小波の文より半月以上遅く書かれたわけだ。遅く書いた文が先に掲載されたことが分かる。これは特ダネ記事であった。時事性がある文を優先した編集方針によったのだ。

小栗という日本の飛行専門家が運営する個人飛行場で訓練を受けていた安昌男が卒業を控えて小波に会ったのだ。安昌男の文は飛行士の授業課程や飛行機運転に関する話を紹介している。ところで彼を紹介する前書きは、明らかに小波の文であるようだ。暗澹たるあの時代に、私たちにも空を飛ぶことができる飛行士がいるということは途方もないニュースだ。

1921年7月11日付、東亜日報には「新飛行家安昌男—小栗飛行学校の助教授、今年20才の朝鮮青年」という記事とともに彼の写真と翼が二重の複葉機の写真も載せられた。これもまた私たちを大きく鼓舞することであり、特に青少年らに希望をあたえる便りだ。小波の息子運用によれば東亜日報に安昌男を紹介したのは小波だという。その時期の友人柳光烈は東亜日報の創刊メンバーに入って記者活動をしていた。彼を通じて、速やかな紹介が可能だったのだろう。小波は日本に行った直後から敏捷に安昌男取材して『開闢』に先に紹介した。東京特派員としての使命を堂々とやり遂げた彼の凱歌であった。

そして1922年11月29日朴永孝、権東鎮他47人が鍾路基督教青年会観で安昌男後援会を発足させた。これらの助けで安昌

男は12月2日船舶便で飛行機をのせて仁川に入ってくる。ソウル空とソウルから仁川に彼の何回の飛行示範は連日新聞紙上に報道されたし、空から五色挨拶状もばら撒いた。数万の群衆は飛行場と漢洞学校運動場、そして広場に集まり空を見上げて熱烈に拍手した。1923年『開闢』1月号には「空中から見た京城と仁川」という安昌男の文がのせられた。とにかくこの期間に私たちの社会は十分に安昌男症候群と言える興奮で沸き立っていた。（李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』ソウル：ハンリム出版社、2005年、219～221頁）^x

安昌男（アン・チャンナム／안창남、1901～1930年）は、朝鮮初の飛行士として当時英雄的存在だった。植民地支配という抑圧の下に暮らしていた朝鮮の人々にとって、大空を自由に飛び回る同胞の姿は民族の希望であったのだろう。そして、1919年に日本に渡り、1920年に日本帝国飛行協会の小栗常太郎が主宰する小栗飛行学校学校に入学していた安昌男を真っ先に取材したのが方定煥だったということにも驚かされる。方定煥の創作児童文学作品の代表作に「万年シャツ」（『オリニ』5巻3号、1927年3月号初出）があるが、この作品の主人公の名前は「チャンナム」だ。そしてあだ名は「飛行家」である。極度の貧困のなかでも、さらに厳しい状況にある家族や隣人がいれば、自分のものを分け与え、極寒の中を靴下もはかず壊れた靴をだましだまし履いて遅刻をしても学校に通う少年。逆境にあっても強い克己心を持ち、明るさと勤勉さを失わない少年。そうした貧しく厳しい植民地朝鮮の現実を生き抜く主人公少年に「飛行家・チャンナム」の名前をつけたところに、方定煥のリアリズムや希望を読み取ることができる。

さらに、『オリニ』誌には、安昌男の写真や記事も掲載された。この国民的ヒーローは、方定煥との個人的な親交も深かったようである。

『オリニ』第9号(1923.10.15)には表紙内側に安昌男と飛行機の写真を載せて彼が故国に無事に帰ってきたという挨拶の言葉が載っている。9月1日の関東大地震のために彼の安否を心配する読者らに対する挨拶の言葉だ。彼はまた第10号特別号(1923年11月15日)に「飛行機はどのようにして浮くのか」という文を寄稿する。これやはり『オリニ』の独占特別記事であり小波の斡旋によったものだ。小波の息子運用によれば、安昌男との友情は厚かったし、東京で小波と一つの布団で寝たこともあったという。これは後日談だが、安昌男は1923年関東大地震後、中国に渡り独立運動に加担したし中国革命軍と協力して飛行学校設立を推進しているところ、1930年4月2日飛行機墜落事故で死亡した。運用はその時安昌男がプレゼントした陶磁器の皿をさわって哀悼した小波を記憶しているという。(李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』ソウル：ハンリム出版社、2005年、221頁)^{xi}

5. 検挙、拘束、取り調べを受ける方定煥

1920年9月に渡日し、天道教人として、開闢社特派員として、活動していた方定煥であるが、1921年2月に天道教東京支会会長となつてすぐに警察によって収監された。1921年2月16日に起きた閔元植暗殺事件の嫌疑である。

しかし突発事故が起きた。おりしも東京にきて、東京ステーションホテルに泊まっていた閔元植(ミン・ウォンシク)が刺客によって殺害された事件に天道教青年会が巻き込まれたのだ。閔元植は徹底した親日派として日本政府にへつらつて自身の事業の保護を受けていた。1920年、民間新聞発行に際して『東亜日報』『朝鮮日報』とともに総督府が最も信頼する味方と認定し許可した『時事新聞』発行人であり、同時に

親日団体として発足した「国民協会」会長である。彼が日本に来た理由は朝鮮の融和策のために内地人と同じ参政権を朝鮮人に付与することが重要だといって日本参議院に請願書を提出するためであった。1920年から日本では普通選挙権に対する政党間の政争と一緒に疎外されてきた労働者らが労働連盟を通じて選挙権獲得のために「普通選挙既成大会」をあちこちで開いてデモとストライキで闘争していた。閔元植は参政権こそ完全な内鮮一体となるという主張で、1920年2月5日に105名の連署で第一次請願書を提出したことがある。しかし採択されなかったために再度1921年2月に227名の連署で請願書を提出するために東京に来たのだ(1924年、警保局保安課『在留朝鮮人ノ状況』)。2月16日、彼は梁槿煥(ヤン・グンファン)によって、ホテルで殺害された。

当時天道教は国内でも国外でも特別監視対象だった。閔元植殺害事件で天道教青年会東京支会の方定煥、朴達成他役員らがこの事件に関連したのではないかとして連行拘禁され20日余りの取り調べを受けることになる。(1921年4月、朴達成「鉄格子で感じたままに」『開闢』、および1983年、方運用「お父様の歩んで行かれた道」『ナラサラン』)また小波はこの時期に『開闢』に「ウンパリ」という社会風刺随筆を連載していたが、「思いがけないことで十数日も鉄格子の中で過ごしてきた。」という内容を含んでいる。これは閔元植事件で拘禁されたことを言っているようだ。このように天道教青年会東京支会は事業を始める前に警察収監という大変な苦勞をすることになった。しかしこれは始まりに過ぎない。以降も、ともすると呼び出され取り調べられ、事前検束をされ、小波の警察署出入りは絶えなかった。(李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』ソウル：ハンリム

出版社、2005年、251～252頁）^{xii}

李相琴は、方定煥が1921年2月の関元植暗殺の嫌疑で連行され20日あまり拘禁された事件を始まりに過ぎないと言っている。方定煥の警察署の出入りは絶えなかったというが、方定煥は1921年のいつかは定かではないが朝鮮に一度戻っている。そして、そこでもまた検挙され拘束されているのである。李相琴の先行研究で、次のような経緯によることが分かる。

1921年11月12日『東亜日報』には、「天道教青年会東京支会長方定煥氏検挙—その他数名と一緒に某運動の疑惑で」という記事が出た。

「10日午前六時ごろに鍾路警察署では天道教青年会東京支会長方定煥(23)氏と同会幹事朴達成氏とその他京城天道教青年会会員数名を逮捕し、たった今嚴重に取り調べ中だというが、その詳しい内容を聴いたところ前記方氏と朴氏とその他数名は太平洋會議を契機として某運動をおこそうと市内の様々な青年を扇動したという嫌疑で前記とともに逮捕されたとのことだ。」

太平洋會議は別名ワシントン會議ともいう。米国大統領選挙の結果、民主党が退いて共和党が勝利する。この年の3月4日、大統領就任式以後、第一次大戦後の軍縮問題と太平洋極東問題を扱う国際會議を開くことになった。1921年11月12日から太平洋會議がワシントンで開かれることになるや、10月10日に李承晩、除載弼らがその會議に独立請願書を提出する。李承晩、除載弼は12月28日に再度独立請願書を提出した。(1976年、「開港100年年表、資料集」『新東亜』) 私たちの民間紙にも太平洋會議はワシントン會議という記事で頻繁に

報道されていた。

東京留学生らは太平洋問題を議論するのに朝鮮問題を度外視しては意味がないとして韓、日、英文の独立宣言書を作成する。これも3・1独立宣言書の時と同じように朝鮮青年独立団の名義で代表李東濟、金松殷、方遠成、李興三、全敏轍の5名が連名して「宣言」と「決議文」を作成した。11月11日、上野公園、日比谷公園、朝鮮キリスト青年會館に集會して行動を開始しようとしたが、警察の制止で失敗に終わって80人余りが連行された。(1925年、内務省警保局『在京朝鮮留学生概況』)

ちょうどソウルに来ていた天道教青年会東京支会長方定煥と幹事朴達成が拘束されたのは、これらと互いに連係して、国内でもある種の行動があることと推測され拘禁されたのだ。これに先立ち、天道教はすでに警察の特別監視網の中で制止を受けていた。京畿道知事は天道教指導者朴寅浩、鄭廣朝を呼び出して、太平洋會議と関連した教徒の動態を事前警告(8月2日)したし、引き続き元山教区長などを召還警告(9月27日)、メンサン教区では40人余りが拘束送検(11月2日)されたことがあった。(1976年、チェ・ドンヒ「天道教年表」『天道教』) 巡回講演を通じて夏の間中聴衆を興奮させ感動させた天道教の方定煥には常に監視の目が付いて回ったのだ。

小波が『天道教会月報』138号に書いた「夢幻の塔で」には、1921年10月31日に天道教教堂で少年会代表らと食事を分かち合い小波の送別を兼ねた會合があったとして記録されている。しかし小波が日本に行ったのは11月29日だ。その約一ヶ月の間どのようなことがあったのか説明されていなかったが、小波が拘束された期間に該当する。(『天道教会月報』138号の発行日時は1921年8月15日になっているが影印本製作時、間違っ付されたものであり、

1922年2月15日が正しい。天道教中央総部、2001年5月18日確認）（李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』ソウル：ハンリム出版社、2005年、252～254頁）^{xiii}

今度は、1921年11月12日から開催されたワシントン会議が原因であった。拘束され、取り調べを受けた後、方定煥は1921年11月29日に再び東京に戻ったようだ。

ところで、前述した方定煥の最初の童話集であり、韓国児童文学の起点とされる『愛の贈り物』は、1921年末に東京白山下で執筆されたと本人が前書きに記している。この日付けに従えば、朝鮮への一時帰国から東京に戻った直後の執筆ということになる。しかも、朝鮮出国直前には、ワシントン会議に乗じた独立運動の嫌疑で逮捕され取り調べを受けているのである。日本でも朝鮮でも繰り返し逮捕され、収監され、取り調べを受け続ける自身の身の上をかみしめながら、どういう思いでアミーチスのクオレやペロー、オスカーワイルド、アンデルセンなどのいわゆる世界名作童話の翻案作品集である『愛の贈り物』を執筆したのだろうか。執筆直前に一時帰国した朝鮮で逮捕収監されていた方定煥の体験を鑑みながら、『愛の贈り物』に書かれた方定煥の前文を読むと、その言葉の重みがあらためて実感されるようである。

虐待され、踏みにじられ、冷たく、暗い中で私たちのようにまた育つ、可哀想な幼い霊たちのために、

深く、同情し大切にす、愛の初の贈り物として、

私は、この本を編みました。

辛酉年末に、日本東京白山下にて ソパ（小波）（方定煥『愛の贈り物（사랑의 선물）』京城：開闢社、1922年7月7日（初版））^{xiv}

『愛の贈り物』は、翌年の1922年7月に開

闢社から京城で出版された。1922年5月19日に方定煥の義父であり、天道教第三代教主の孫秉熙が亡くなっている、その葬儀に参列するために再度朝鮮に帰国した方定煥が東京で執筆した原稿を持ち帰り出版したのではないだろうか。その後、時期は不明であるが、方定煥は天道教青年会東京支会会長の役は解かれたことが李相琴の研究で明らかにされている。

このように、小波は天道教青年会の件で1年間に二回も拘束される。それにもかかわらず、東京支会は事務所も構えることになり会員も増えた。1923年現在、状況は次のようだ。（1924年、朝鮮総督府警務局東京出張員「在京朝鮮人状況」）

東京天道教青年会

事務所 小石川区大塚坂下町190

創立年月 大正10年(1921年)2月

現会員数 50名

趣旨綱領 天道教宗旨宣教徒ノ親睦

布徳部長 朴思稷

幹議員 閔爽鉉、方定煥

小波は1923年には支会長職責を免じてオリニ運動に専念することになった時期であることを知ることが出来る。小波が日本に最初の一步を始めた天道教はその後も教勢を拡張して天道教宗理院および天道教青年党、天道教学生会、天道教内需団、天道教少年会、天道教農民社の会員が340人に達して、朴思稷、閔爽鉉は常時要監視対象甲号名簿に上がっている。また東京だけでなく、京都宗理院会員も130人に達する。（1929年9月末現在『在留朝鮮人主要団体系統其ノ他一覧表』）

1923年9月1日関東大地震が起きた時、朝鮮人が虐殺された事実は私たちもよく知っている。その時天道教事務室は災いを免じたし、朝鮮人らの連絡本部となった。

朴思稷、閔奭鉉の他にチェ・スンマン、ピョン・ヒヨンなど10人余りがグループを分けて、被害調査をして慰問をしてその日その日の報告事項を天道教事務室で集計したという。その時、天道教が大変重要な役割を果たしたということになる。(1973年、チェ・ウンヒ『祖国を探すまで 下』(李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』ソウル：ハンリム出版社、2005年、254～255頁)^{xv}

1920年9月に渡日し、翌年1921年には正式に天道教青年会東京支会を立ち上げ、その初代会長として活躍した方定煥は、1921年の閔元植暗殺事件やワシントン会議に関連した嫌疑で東京でも朝鮮でも逮捕収監を経験し、1922年5月の孫秉熙の死を経て、1923年には天道教青年会東京支会会長の重責から離れていたのがあった。

6. 方定煥の悲しみ

ところで、李相琴が、方定煥の渡日の正確な日付けの根拠とした『開闢』(1921.1.1第7号)の「月夜に故国を懐かしみ」という文章であるが、最後にその内容を検討しておきたい。

鞍岩山の花崗岩を削り取った岩の下、果樹園の中の小さい家、その中で貧困にあえぎながら涙の暮らしをつづけるかわいそうなお姉様、お姉様がお母様亡き後は淋しく私だけを信じ、私だけを世の中唯一の存在と思い、遠方ではあるがしょっちゅう寄って行きなさい、しょっちゅういらっしやいと、時々会おうと待ちこがれているのに、勉強に仕事にと忙しいことを言い訳にしょっちゅう行くことができず、待ち焦がれてもかなわず、たぶん忘れてしまったのでしょうと一人でお母様を想い、私を想い、幼い妹を想い、絶えず泣いていたというお姉様!

ああ、お姉様は、私が日本に行ったという話を聞いてどれほど泣いたことだろうか。日本がどこかも知らず、陰しく恐ろしく永遠に会うことのできない道を行ったものと思い、かわいそうなお姉様はどれだけ骨にしみる涙を流したことだろうか。

出発が急ではあったが、それほどまでに想ってくださるお姉様に別れも告げずに来て、来ても住所番地も分からず、手紙一通も送れずにいるのだから、どうしているかと心配ばかりしている心はいかばかりか。ああ物価は高く時節は険しいが、お姉様は今頃いかがお過ごしでいらっしやるのだろう……力なく閉じた目の中に、暗闇の中、やつれて青白い顔をした田舎くさいお姉様のぼんやりと涙流す姿が悲しげに映る……(方定煥「月夜に故国を懐かしがって」『開闢』1921.1.1第7号)^{xvi}

朝鮮に残した実の姉を想う文章であるが、それが妻子ではなく、きょうだいへの切実な思いであるところが、方定煥の個人史を表しているのだろう。李相琴は次のように述べている。

『開闢』(1921.1.1第7号)の「月夜に故国を懐かしみ」は、小波が生まれて初めて見慣れぬ日本の地に行き体験した郷愁病(ホームシック)を書き留めた文だ。秋夕(チュソク)次の次の日に書いたというから、陽暦では9月28日だ。10日あまり前に来たというから、9月中旬にたどり着いて旅館に泊まっていた。陰暦8月17日の皓々と明るい月が小波のセンチメンタルを精一杯注ぎ込んだようだ。早稲田にある旅館に入った小波は、寝付くことができず、周辺の路上を野原を練兵場を徘徊しながら、とめどなく涙があふれる。小波の胸に食い込むように痛む感慨は、彼の実家の家族の事情だった。

小波が結婚したのは1917年4月8日だ。

あまりにも貧しい暮らし向きだったため、総督府土地調査局写生字でありながらもともに食べることもできずに痩せこけていた彼が、孫秉熙の婿になってからは日増しに体つきは良くなり見栄えがするようになった。天道教と普成専門学校を背景に彼の才能は日進月歩遺憾なく発揮され、文章を書いて青年を集めて雑誌を発行し、彼の活動は光を放った。3・1独立運動で彼は堂々たる一役を担った。新文化主義運動に若い旗手として率先して民族の覚醒を声を高めて叫んだ。そして、情感豊かで知性的な新女性と愛も分かちあった。

故国をふらりと出て、客地で秋夕（チュソク）の名節を送り明るい月を眺めれば誰もが故郷と家族が思い出されるのは人の常かもしれないが、小波の胸深いところから湧く涙は、より原初的な悲しみからであった。この文章で小波の妻と子どもらに対する感慨は全く言及されない。貧困に苦しめられる実家の家族に対する根深い哀切の想いだけだ。

小波の母親は本来病弱な体で、それまで薬も一度もまともに使うこともできずに長く病気で寝こんだまま過ごし、息子の結婚後1ヶ月も経たない5月6日に亡くなった。小波の下に幼い妹二人を残したまま、小波の胸はどれほど痛んだことだろうか。それより先に小波が十才の時、姉が十二才の幼い年齢で口減らしのために嫁に行った。振り返りながら婚家へ旅立つ姉に分からぬように、少し離れたところで隠れてぼろぼろと流した涙の記憶は、いまだに彼の胸に深い傷として残っていた。亡くなった母親と嫁入りして苦勞する姉を考えると、どんな時でも手のほどこしようがないくらい彼の涙腺からは涙がほとぼしり溢れ出た。（李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』ソウル：ハンリム出版社、2005年、244～245頁）^{xvii}

日本に渡り、慣れない東京でホームシックにかかった方定煥なのであるが、これは誰もが経験することであり、近代日本の文豪たちもイギリスやドイツでホームシックにかかったのではないか。それにしても、夏目漱石がイギリスでかかったホームシックや森鷗外がドイツでかかったホームシックと、方定煥が東京早稲田の旅館でかかったホームシックは、どのような違いがあるだろうか。夏目漱石も森鷗外も、帝国のエリートとして、帝国の先輩であるイギリス、ドイツに先進文明を吸収しに帝国によって派遣されている身分である。一方、方定煥は、極貧の中、植民地朝鮮に生きた独立運動家であり、既存の社会構造に異を唱え、人間性解放を唱えた民族宗教団体の幹部である。立場の違いは明白であり、これが近代日本文学と朝鮮文学の違いとしても表れる。

極貧を経験した方定煥の悲しみは、他稿で触れた創作童話『万年シャツ』にも描かれたが、方定煥の伝記などで必ず描かれているのは彼が演じた口演童話会での聴衆たちの感涙である。李相琴も次のように記している。

小波の話はどんな名俳優にも劣らない表現演技で聴衆を惹きつけたとのが彼の童話を聞いた人々の終始一貫した評価だ。彼は話をしながら悲しい題目になると自身も涙をぼろぼろ流して聴衆を泣かせた。どうやったら実感するかのように本当に涙をそんなにも流すことができるのか。よく名が知られた名演技者たちが目薬を使わないで涙を流す時は自身の悲しい経験を思い出しながら泣くというが、小波は「お母さん」というだけで涙が出てくる人だった。

客地の月夜に旅館を抜け出し彷徨いながら、小波は今さら彼の実家の家族らの苦勞を再確認していた。結婚後わが国の習わし通りならば、新婦ヨンファが婚家である方氏の家に入らなければならない。さらに小波は長男で初孫だ。しかし妻の実家で暮ら

すことになったのは、妻の母である洪氏夫人の主張が通ったからでもあるが、社稷洞都正宮の前の崩れかけた藁葺きの家には家族が多く、新婦を迎える部屋もなかった。どうすることもできない現実のために、小波は妻の実家暮らしをすることになったし、そのおかげで体つきは良くなったが、心の片隅には実家の貧困が重い荷物として残っていた。

いつのことか分からないが、小波の実家は西大門紅把洞に移った。父親の慶洙は再婚し、次々とまた娘だけ三人をもうけた。息子は大事な家であるようだ。息子の役割をまともにできず妹たちを養えない小波なので、客地でのセンチメンタルは血まめができるような慚愧心であった。しかし、小波は貧困の悲しみに座り込むことはできなかった。せねばならぬことがあまりにも多かった。(李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』ソウル：ハンリム出版社、2005年、247頁) ^{xviii}

日本に渡った方定煥は、天道教青年会東京支会の発起人として、会長として、果たすべき仕事があったし、開闢社特派員として取材もし、記事も書いた。しかし、近代の日本の文豪たちが国費留学生として英文学や医学を学びながらも、帰国後は文学で自己の深い苦悩を表現し、それが近代日本文学の傑作となったように、方定煥は、植民地朝鮮の民族宗教団体であり独立運動の団体から派遣されて東京に居留し、自己の深い苦悩と悲しみを童話文学にぶつけていったのだと言えるだろう。

7. おわりに

方定煥の留学は、韓国児童文学史から見ると、その留学があってこそ、韓国初の世界名作童話集が生まれ、子どものための本格的な文芸誌が生まれ、その文芸誌を舞台に創作童話や後に国民愛唱歌となるような童謡が生まれ、後続の作

家たちが誕生し、これまでの朝鮮になかった新しい文化としての「児童文化運動」が始まったものと認識されている。

近代韓国児童文学は、方定煥の東京留学を契機に本格的に始まったといえる。だが、確かにそれが事実で、そのような成果があったとしても、だからといって方定煥の東京留学の目的が最初から児童文学にあったと安易に判断してはならない。本稿で精読した李相琴の先行研究は、方定煥の個人史をたどりながら、結局は植民地朝鮮の時代的制約や1920年代の政治状況を考察することとなる。

方定煥の渡日は植民地統治体制の制約の中で実行されたことで、当時はまだ難しかった留学生としての身分ではなく、雑誌の特派員という身分で渡航していた。朝鮮総督府は、武力で抑圧するのではなく文化統治に切り替えたことから、1920年春、『朝鮮日報』や『東亜日報』などの現在に続く大手新聞が刊行され、それに続くかたちで近代朝鮮を代表する総合雑誌『開闢』も生まれた。方定煥はこの『開闢』の特派員として渡日できたのだ。渡日後は、特派員記者としての活動だけでなく、天道教青年会東京支会を発足させたり、初代会長としての重責を果たしたりした。

『開闢』は近代朝鮮の文壇を代表する総合雑誌であるが、発行元は天道教で、天道教の機関誌でもあった。そして、渡日後すぐにとりかかった大きな仕事は、やはり天道教青年会東京支会を発足させたことと初代会長に就任したことであっただろう。方定煥の渡日には、天道教人としての渡日という側面があったことは決して見過ごしてはならない。

天道教は民族宗教であり、抑圧されてきた農民たちが旧来の朝鮮社会に異を唱え人間性解放を訴えた東学を基にする団体である。そしてその後の植民地支配に抵抗したのも当然のことで、独立運動の主体となった。方定煥は、この天道教の第三代教主孫秉熙の娘婿である。韓国児童文学の出発点とされる方定煥の東京留学も、こ

の天道教の後ろ盾があってこそのものであったことは深く認識しなければならないだろう。

*本稿は、日本学術振興会科学研究費（基盤研究（C））、（課題番号：15K02460）による研究成果の一部である。

参考文献

<韓国語文献>

- ・『開闢』開闢社（1920年6月～1926年8月、通巻72号）
- ・『어린이』開闢社（1923年3月～1934年7月、通巻122号）
- ・李在徹『韓国現代児童文学史』seoul：一志社、1978年
- ・——『韓国児童文学作家論』seoul：一志社、1983年
- ・——『世界児童文学大事典』啓蒙社、1989年
- ・——「児童雑誌『어린이』研究」、『韓国児童文学研究』seoul：啓蒙社、1983年
- ・이상금『소파 방정환의 생애—사랑의 선물』한림출판사、2005年
- ・조성운『소년운동을 민족운동으로 승화시킨 방정환』역사공간、2012年
- ・염희경『소파 방정환과 근대 아동문학』경진、2014年
- ・민윤식『방정환 평전』스타북스소파、2014年

<日本語文献>

- ・李在徹「韓国児童文学の歴史と現状」、児童文学者協会『日本児童文学』1990年6月号
- ・——「1920年代の韓半島の児童書——児童雑誌を中心にして」、『子どもの本・1920年代展図録』1991年
- ・——「韓日児童文学の比較研究（1）」、大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集1989～1990』1993年
- ・李相琴「方定煥と「オリニ」誌—「オリニ」誌刊行の背景—」、大阪国際児童文学『外国人

- 客員研究員 研究報告集1995～1996』1997年
- ・——「日本と韓国にかける児童文化の橋～韓国オリニ文化をとおして考える～」、大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集1995～1996』1997年
- ・仲村修「方定煥研究序論—東京時代を中心に」、『青丘學術論集14』1999年
- ・李延炫『方定煥の児童文学における翻訳童話をめぐって—「オリニ」誌と「サランエソナムル（愛の贈り物）」を中心に』大阪大学大学院言語文化研究科修士論文、2004年
- ・金永順『植民地時代の日韓児童文学交流史研究—朝鮮総督府機関紙「毎日申報」子ども欄を中心に—』梅花女子大学大学院博士学位請求論文、2006年
- ・黄善英『「童心」の思想と詩法——日韓近代の童謡運動』東京大学大学院博士学位請求論文、2007年
- ・金成妍『越境する文学—朝鮮児童文学の生成と日本児童文学者による口演童話活動—』九州大学大学院比較社会文化学府・日本社会文化専攻博士学位請求論文、2008年
- ・大竹聖美『植民地朝鮮と児童文化』社会評論社、2008年
- ・——「方定煥研究～誕生から10歳まで・幼少期の生家と時代背景：評伝『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』を読む～」、東京純心女子大学『紀要』第18号、2014年
- ・——「方定煥と天道教——孫秉熙の三女との結婚まで～評伝『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』を読む～』東京純心女子大学『紀要』第19号、2015年
- ・——「1919年前後の方定煥——<小波（ソパ）>の由来と3・1独立運動』東京純心大学『紀要』現代文化学部、第20号、2016年
- ・——「韓国近代児童文学創成期における愛——方定煥の児童文学における愛」、東京純心大学キリスト教文化研究センター紀要『カトリコス』第10号、2017年
- ・——「新文化運動と方定煥——李相琴『小

波・方定煥の生涯——愛の贈り物』に見る天道教青年会発足と『開闢』創刊」東京純心大学『紀要』現代文化学部、第21号、2017年

i (原文)

소파가 언제 일본에 건너갔느냐에 대한 기록도 가지가지다. 어린이 전기를 포함하여 어떤 기록은 3.1 독립운동 직후라든가 1919년 연말이라는 조기 도일설이 있다. 그러나 이것은 대단히 안일한 발상이라고 밖에 할 수 없다. 근 1년 가까이 한반도 곳곳에서 만세시위가 계속되고 있을 때이다. 독립운동시 천도교 핵심에 있었고 특히 < 독립신문 > 사건으로 구속되어 취조도 받았던 중요한 감시 대상인 소파를 총독부가 그냥 가고 싶을 때 호락호락 가게 한다는 것은 어렵도 없는 실정이었다. 총독부는 1919년 4월 경시총감령警視總監令 제3호 ‘조선인의 여행 취체에 관한 건’을 공포하여 조선인의 일본 여행을 엄중히 단속하였다. 여행을 하려면 우선 거주지 관할경찰서에 여행지와 여행 목적을 신고하여 허가서를 받아야 했다. 특히 유학생에 대해서는 가장 경계했고 위의 여행허가서 외에 유학생의 주소, 원적, 가족 직업, 재산보고, 유학할 학교명, 본인의 성질, 경력, 주의, 당파계통, 신용정도 및 평소 교제하는 사람, 통신자에 이르기까지 소상한 신원조회를 거쳐야 했다. 사이토 총독의 융화 정책으로 유학생규제가 풀린 것은 1920년 11월이며 그 후 여행규제가 완전히 폐지된 시기는 1922년이다. (1976 阿部洋 ‘解放前日本留學の史的展開過程とその特質’ <韓>12) 이러한 규제완화에 따라 유학생 수는 급증한다. 참고로 1919년 당시 678명이던 것이 1920년 1,230명, 1922년에는 3,222명으로 늘었다.

ii (原文)

이 와중에 소파는 1920년 9월 중순 일본

에 갔다. 아직 유학생규제가 풀리기도 전이다. 어떻게 가능했을까. 그는 개벽사 특과원으로 떠난 것이다. 이후 소파가 일본에 체재하는 명분은 세 가지였다. 첫째 개벽사 특과원, 둘째 천도교 청년회 임원, 셋째 도오요東洋대학 유학생이다. 여행허가서는 개벽사 특과원 자격으로 신청했으니 경찰도 시비를 걸 수 없었던 모양이다.

iii (原文)

소파가 일본에 간 시기를 1920년 9월 중순으로 추정 한 것은 ‘달밤에 고국을 그리워하며’에 10여 일 전에 도쿄에 왔다고 하는 글 말미에 기재된 날짜 9월 28일에서 역산하면 그 언저리가 되기 때문이다. <천도교회월보>127호에 고학생이라고 자칭하는 우공又窻이란 교인이 9월 14일에 방군을 만나 악수를 나누었다고 하니 이것은 확실하다. 우공의 글에 의하면 이어 16일 밤에 몇몇 천도교 청년들이 방정환과 우에노上野공원에서 만나 유학생 중에 신도가 얼마나 있는지 조사하여 보고하기로 했다.

iv 「韓国近代児童文学創成期における愛——方定煥の児童文学における愛」東京純心大学キリスト教文化研究センター論文集『カトリコス』第10号、2017年1月

v (原文)

이때부터 소파의 주도로 도쿄 천도교청년회 조직을 위한 움직임이 시작된다. 또한 우공의 글은 해가 바뀐 1월초부터 조선유학생이 모이는 곳마다 ‘천도교청년회 도쿄지회 발기’라는 광고가 붙었고 7일에는 박달성이 도쿄에 왔다고 전한다. 앞서 소개한 소파의 ‘이역의 신년’ (1921. 1. 15<천도교회월보>127호)에도 1월 2일에 받은 박달성의 엽서에 곧 도쿄에 온다는 소식이 전해졌었다. 그리고 ‘교우 또 한사람을 맞고’ (1921. 2<천도교회월보>126호)에도 박달성을 환영하는 글을 쓰고 있다. 따라서 1921년 정초부터 천도교 청년회의 핵심 임원 소파와 박달성에 의해 도쿄지회의 설립이

진행된 것을 알 수 있다.

김상근

vi (原文)

이기정

박달성은 평북 태천 출신으로 1894 년생이다. 어려서 한문수학을 했고 11 세부터 천도교교리강습소에서 수학을 하고 그 곳에서 강사노릇도 했다. 상경하여 보성고등보통학교를 나와 태천군 천도교교구 공선원으로 있다가 천도교회월보사 촉탁으로 근무한다. 3.1 독립운동후 천도교가 청년회와 개벽사를 발족할 때부터 중앙 임원으로 참여하고 후에 개벽사의 < 부인 > 편집, < 신인간 > 주필로 활동한다. 그의 호는 춘파春坡이며 필명으로 가자봉인茄子峰人을 썼다. 그의 집은 소파네와 가까운 재동이었고 개벽사와 소년회에서 소파와 평생동지로 일하게 된다.

정중섭

박달성

이리하여 당일 모인 인원이 10 여명이고 주소성명을 알린 사람이 5, 6 명이었다. 이날 토의된 것은 교인의 우의를 돈독하게 하고 교리연구를 철저하게 하기 위해 일정한 장소에서 시일 예식을 갖도록 할 것, 장소문제는 본회에 후원을 청할 것, 포교에 관한 건, 하기강연에 대한 것이었으며 5 시에 끝났다. 이날 장소는 박달성이 묵은 여관이었고 또 몇 달 전 소파가 도쿄에 처음 와서 와세다 근교를 눈물지으며 배회하고 ‘달밤에 고국을 그리워하며’ 를 쓴 바로 그 여관이다. 아마 천도교인들이 자주 이용한 곳인 듯하다.

vii (原文)

이 후 발기회의 자세한 경과를 박춘파(박달성)의 ‘도쿄에 있는 천도교청년의 현황을 보고하고’ (1921. 2 < 천도교회 월보 > 126 호)에서 볼 수 있다. 1 월 16 일 일요일은 천도교인이 예배를 보는 시일侍日이다. 도쿄에서의 첫 집회가 열렸다. 장소는 와세다의 여관早稻田鶴巻町 302 大扇館이고 모인 사람은 方定煥, 金相根, 李起貞, 鄭重燮, 李泰運, 朴春燮, 金光鉉, 朴達成 등 10 여인이었고 오후 1 시 정각에 시일 예식과 교회발전에 대한 토의를 진행하였다. 이 모임에 앞서 방정환은 간다神田에 있는 기독교청년회관에 천도교집회를 알리는 광고를 내붙였다. 광고문은 다음과 같다.

viii 天德頌 (천덕송) : 天道教のハンウル様の徳を称える歌

ix (原文)

두 번째 시일 모임은 1 월 23 일에 있었다. 박달성 외 7, 8 명의 회원이 때를 지어 계림사로 향한다. 계림사는 앞에서 소개한 바 있는 소파가 집 한 채를 세내어 공동으로 자취를 시작한 곳이다. 11 시에 당도하니까 方, 李 양씨가 예탁에 청수를 모시고 기다리는 중이었다. 이씨는 이기정인 듯하다. 시일 예식의 모양을 박달성의 글을 통해 더듬어본다.

천도교청년회 동경지회설립에 대하여 상의할 사 유하오니 천도교청년으로서 동경에 재류하는 제씨는 모일모시모장소(일시장소는 별기하얏기 약함)로 내림하시되 혹 사고에 의하여 미참이 되시겠거든 주소성명을 해장소로 통지하심을 양요함.

天師의 前에 감사함을 仰告하고 뜻한바대로 성취하겠다고 각각 重盟을 드린 뒤에 “시천주 조화정 영세불망 만사지” 十三字를 엄숙리에 세 번 고창하얏나이다. 그리고 방정환씨의 人乃天주의에 대한 명쾌한 강연과 이기정씨의 동경에 대한 시일의 감상담이 유한 후 다시 “神師靈氣我心定無窮造化今日至” 를 일곱 번 고창하얏나이다. 天德頌은 책이 무함에 인하여 약하오매 매우 미안하얏소이다. 식을 폐하고 청수를 분음하니 茶아니면

포덕 62년 1 월 10 일

천도교청년동경지회발기인 대표 방정환

白湯만 먹는 일본에서 냉수나마 황공하게 음복함은 실로 천도교식이 분명하더이다.

위의 글을 통해서 소파의 진지한 천도교인 역할과 자세를 다시 확인하게 된다. 그는 단순한 평신도가 아니라 천도교 지도자로서의 책임을 다하고 있었다. 천도교청년회 도쿄지회가 정식으로 창립총회를 열고 방정환을 초대 지회장으로 추대한 것은 그로부터 20일 후 2월 13일이다. 소파는 천도교가 일본에 첫 삽을 내리는 증책을 거뜬히 해낸 것이다.

x (原文)

개벽사 특과원으로 그가 수행한 첫 번째 과제는 우리 나라 최초의 비행사 안창남을 취재하고 본국에 소개한 일이다. 소파와 안창남은 미동보통학교 동창이다. 소파는 1910년 매동보통학교에서 미동보통학교 2학년에 편입했고 두 살 아래 안창남은 1911년 미동보통학교에 입학했다.

소파의 졸업은 1913년, 안창남의 졸업이 1915년이니 적어도 2년 동안 같은 교정에서 지낸 셈이다. 그들이 개인적으로 얼마나 친했는지는 알 수 없으나 안창남을 고국에 소개한 후 그들은 아주 가깝게 지냈다.(1965 ‘아버님이 걸어가신 길’ <소파 아동문학전집 >)

소파가 <개벽 > 7호(1921, 1월호)에 ‘달밤에 고국을 그리워하며’를 읽고 그 말미에 ‘추석 다음다음 날에’라는 낱자를 기록하고 있다. 이것은 음력 8월 17일이고 양력으로는 9월 28일이다. 그리고 안창남은 <개벽 > 6호(1920, 12월호)에 ‘오구리 비행장에서’를 기고한다. 안창남의 글은 집필 일자가 ‘10월 15일 밤에’라고 했으니 위의 소파의 글보다 보름이상 늦게 쓰여진 셈이다. 늦게 쓴 글이 먼저 게재된 것을 알 수 있다. 이것은 특종 기사였다. 시사성이 있는 글을 우선한 편집방침에 의한 것이다.

오구리小栗라는 일본 비행전문가가 운영하는 개인 비행장에서 훈련을 받고 있던 안

창남이 졸업을 앞두고 소파를 만난 것이다. 안창남의 글은 비행사 수업과정이나 비행기 운전에 관한 이야기를 소개한다. 그런데 그를 소개하는 머리글은 분명히 소파의 글인 것 같다. 암담한 그 시절에 우리에게도 하늘을 날 수 있는 비행사가 있다는 것은 엄청난 뉴스이다.

1921년 7월 11일자 동아일보엔 “신 비행가 안창남—소울小栗 비행학교의 조교수, 금년 20세의 조선청년”이란 기사와 함께 그의 사진과 날개가 두 겹인 쌍엽비행기 사진도 실렸다. 이 또한 우리를 크게 고무하는 일이며 특히 청소년들에게 희망을 주는 소식이다. 소파의 아들 운용에 의하면 동아일보에 안창남을 연결한 것은 소파라고 한다. 그 시절 친구 유광렬은 동아일보의 창간멤버로 들어가 기자활동을 하고 있었다. 그를 통해 신속하게 연결이 가능했을 것이다. 소파는 일본에 간 직후부터 민첩하게 안창남을 취재하고 <개벽 >에 먼저 소개했다. 도쿄 특과원으로서의 몫을 단단히 해낸 그의 개가였다.

그리고 1922년 11월 29일 박영효, 권동진 외 47인이 종로 기독교청년회관에서 안창남 후원회를 발족시켰다. 이들의 도움으로 안창남은 12월 2일 선박편으로 비행기를 싣고 인천에 들어온다. 서울 하늘과 서울에서 인천으로 그의 몇 차례의 비행시범은 연일 신문지상에 보도되었고 하늘에서 오색인사장도 뿌렸다. 수만의 군중은 비행장과 미동학교 운동장 그리고 광장에 모여 하늘을 올려다보며 열렬하게 박수를 쳤다. 1923년 <개벽 > 1월호에는 “공중에서 본 경성과 인천”이란 안창남의 글이 실렸다. 아무튼 이 기간에 우리 사회는 가히 안창남 신드롬이라고 할 수 있는 흥분으로 들끓고 있었다.

xi (原文)

<어린이 > 제 9호(1923. 10. 15)에는 표지 안쪽에 안창남과 비행기 사진을 싣고 그가 고국에 무사히 돌아왔다는 인사말이 실려 있다. 9월 1일의 관동대지진 때문에 그

의 안부를 걱정하는 독자들에게 대한 인사말이다. 그는 또 제 10호 특별호(1923. 11. 15)에 ‘비행기는 어떻게 뜨나’라는 글을 기고한다. 이것 역시 <어린이>의 독점 특별기사였으며 소파의 주선에 의한 것이다.

소파의 아들 운용에 의하면 안창남과의 우정은 두터웠으며 도쿄에서 소파와 한 이불에서 잠잠 일도 있었다고 한다.

이것은 후일담이지만 안창남은 1923년 관동대지진 후 중국에 건너가서 독립운동에 가담하였고 중국혁명군과 협력하여 비행학교 설립을 추진하던 중 1930년 4월 2일 비행기 추락사고로 사망하였다. 운용은 그 때 안창남이 선물했던 도자기 접시를 어루만지며 애도하던 소파를 기억한다고 말했다.

xii (原文)

그러나 돌발사건이 생겼다. 때마침 도쿄에 와서 스테이션 호텔에 묵고 있던 민원식閔元植이 자객에 의해 살해된 사건에 천도교청년회가 말려든 것이다. 민원식은 철저한 친일파로서 일본정부에 아부하고 자신의 사업을 비호받고 있었다. 1920년 민간신문 발행에 즈음하여 <동아일보> <조선일보>와 함께 총독부가 가장 신뢰하는 자기편으로 인정하여 허가한 <時事新聞> 발행인이자 동시에 친일단체로 발족한 ‘국민협회’ 회장이자. 그가 일본에 온 이유는 조선의 융화책을 위해 내지인과 같은 참정권을 조선인에게 부여하는 것이 중요하다 하여 일본 참의원에 청원서를 제출하기 위해서였다. 1920년부터 일본에서는 보통선거권에 대한 정당간의 政爭과 더불어 소외되어온 노동자들이 노동연맹을 통해 선거권 획득을 위해 ‘보통선거기성대회’를 곳곳에서 열고 태모와 스트라이크로 투쟁하고 있었다. 민원식은 참정권이야말로 완전한 내선일체가 되는 길이라는 주장으로 1920년 2월 5일에 105명 연서로 제 1차 청원서를 제출한 바 있다. 그러나 채택되지 않았기 때문에 재차 1921년 2월에 227명의 연서로 청원서를 제출하기 위해 도

쿄에 온 것이다.(1924 警保局保安課 <在留朝鮮人ノ狀況>) 2월 16일 그는 양근환에 의해 호텔에서 살해되었다.

당시 천도교는 국내이건 국외이건 특별 감시대상이었다. 민원식 살해사건으로 천도교청년회 도쿄지회의 방정환, 박달성 외 임원들이 이 사건에 관련된 것이 아닌가 하고 연행 구금되어 20여일의 취조를 받게 된다.(1921. 4 박달성 ‘철창에서 느낀 그대로’ <개벽>. 및 1983 방운용 ‘아버님의 걸어가신 길’ <나라사랑>) 또한 소파는 이 시기에 <개벽>에 ‘은과리’라는 사회풍자 수필을 연재하고 있었는데 “뜻밖의 일로 십수일이나 철창 속에 지내다가 나왔다.”라는 내용을 담고 있다. 이것은 민원식 사건으로 구금된 일을 말한 것 같다. 이처럼 천도교청년회 도쿄지회는 사업을 시작하기도 전에 경찰 수감이라는 곤욕을 치르게 되었다. 그러나 이것은 시작에 불과하다. 이후에도 특하면 호출하고 취조하고 사전검속을 하고 소파의 경찰서 출입은 끊이지 않는다.

xiii (原文)

1921년 11월 12일 <동아일보>에는 ‘천도교청년회 동경지회장 방정환씨 검거—기타 수명과 같이 모운동의 혐의로’라는 기사가 나왔다.

작 10일 오전 여섯시 경에 종로경찰서에서는 천도교청년회 동경지회장 方定煥(23)씨와 동회 간사 朴達成씨와 기타 경성 천도교청년회 회원 수명을 체포하여 방금 엄중히 취조중이러는데 이제 그 자세한 내용을 듣건데 전기 방씨와 박씨와 그 외 수명은 태평양회의를 기획 삼아 모운동을 이르기라고 시내 여러 청년을 선동하였다는 혐의로서 전기와 같이 체포된 것이라더라.

태평양회의는 일명 워싱턴회의라고도 말한다. 미국 대통령선거 결과 민주당이 물러나고 공화당이 승리한다. 이 해 3월 4일 대

통령취임식 이후 제 1 차대전 후의 군축문제와 태평양 극동 문제를 다루는 국제회의를 열게 되었다. 1921년 11월 12일부터 태평양회의가 워싱턴에서 열리게 되자 10월 10일에 이승만, 정경한, 서재필, 신흥우가 그 회의에 독립청원서를 제출한다. 이승만, 서재필은 12월 28일에 재차 독립청원서를 제출했다.(1976, '개항 100년연표, 자료집' <신동아>) 우리의 민간지에도 태평양회의는 워싱턴회의라는 기사로 빈번하게 보도되고 있었다.

도쿄유학생들은 태평양문제를 논의하는데 조선문제를 도외시하면 의미가 없다 하여 한, 일, 영문의 독립선언서를 작성한다. 이것도 3.1 독립선언서 때와 같이 조선청년독립단의 명의로 대표 李東濟, 金松股, 方遠成, 李興三, 全敏轍의 5명이 연명하여 '선언'과 '결의문'을 작성했다. 11월 11일 우에노공원, 히비야공원, 조선기독교청년회관에 집회하여 행동을 개시하려 했으나 경찰의 제지로 무산되고 80여 명이 연행되었다.(1925 內務省警務局 <在京朝鮮留學生概況>)

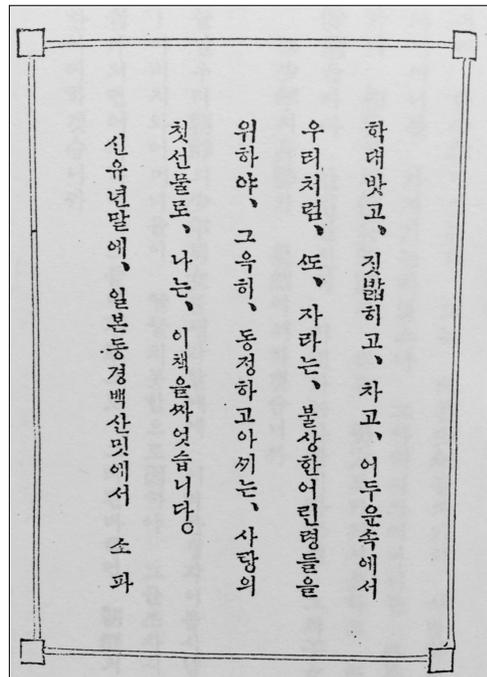
마침 서울에 와 있었던 천도교청년회 도쿄지회장 방정환과 간사 박달성이 구속된 것은 이들과 서로 연계해서 국내에서도 모종의 행동이 있을 것으로 짐작하여 구금당한 것이다. 이에 앞서 천도교는 이미 경찰의 특별감시망 속에서 제지를 받고 있었다. 경기도지사는 천도교 지도자 박인호 정광조를 호출해서 태평양회의와 관련한 교도의 동태를 사전 경고(8월 2일)하였고 이어 원산 교구장 등을 소환 경고(9월 27일), 맹산교구에서는 40여 명이 구속 송청(11월 2일)된 바 있었다.(1976 최동희 '천도교연표' <천도교>) 순회강연을 통해서 여름내내 청중을 흥분시키고 감동하게 만든 천도교인 방정환에게는 항상 감시의 눈이 따라다녔던 것이다.

소파가 <천도교회월보> 138호에 쓴 '夢幻의 塔에서'는 1921년 10월 31일에

천도교 교당에서 소년회 대표들과 음식을 나누며 소파의 송별을 겸한 회합이 있었던 것으로 기록되어 있다. 그러나 소파가 일본에 간 것은 11월 29일이다. 그 약 한달 동안 무슨 일이 있었는지 설명되지 않았으나 소파가 구속된 기간에 해당한다.<천도교회월보> 138호의 발행일자는 1921년 8월 15일로 되어있으나 영인본 제작시 잘못 작업된 것으로 1922년 2월 15일로 바로 잡음. 천도교중앙총부 2001년 5월 18일 확인)

xiv (原文)

原書前文頁より



* 方定煥『愛の贈り物 (사랑의 선물)』開闢社、11版(1928年11月5日)、韓国・春川教育大學圖書館「蘭丁文庫」所蔵

xv (原文)

이와 같이 소파는 천도교청년회 건으로 1년 사이 두 번이나 구속을 당한다. 그럼에도 불구하고 도쿄지회는 사무소도 갖게 되고 회원도 늘었다. 1923년 현재 상황은 다음과 같다.(1924 朝鮮總督府警務局東京出張員 <在京朝鮮人狀況>)

東京天道教青年會

事務所 小石川區大塚坂下町 190

創立年月 大正 10 年 2 月(1921 年)

現會員數 50 名

趣旨綱領 天道教宗旨宣 教徒ノ親睦

布徳部長 林思稷

幹議員 閔奭鉉, 方定煥

소파는 1923 년에는 지회장 직책을 면하고 어린이운동에 전념하게 된 시기임을 알 수 있다. 소파가 일본에 첫 삼을 내린 천도교는 그 후에도 교세를 확장하고 천도교종리원 및 천도교청년당, 천도교학생회, 천도교내수단, 천도교소년회, 천도교농민사의 회원이 340 명에 이르고 박사직, 민석현은 항시 요감시 대상 甲호 명단에 올라 있다. 또한 도쿄 뿐만 아니라 교토京都종리원 회원도 130 명에 이른다.(1929. 9 月末現在 <在留朝鮮人主要團體系統其ノ他一覽表>)

1923 年 9 月 1 日 관동대지진이 일어났을 때 조선인이 학살된 사실은 우리도 익히 아는 바이다. 그 때 천도교 사무실은 화를 면했으며 조선인들의 연락본부로 삼았다. 박사직, 민석현 외에 최승만, 변희용 등 10 여명이 그룹을 나누어 피해조사를 하고 위문을 하고 그날 그날의 보고사항을 천도교사무실에서 집계했다고 한다. 그 때 천도교가 매우 요긴한 역할을 다한 셈이다.(1973 최은희 <조국을 찾기까지.하>)

xvi (原文)

안암산 화강석 깨뜨려 내는 바위 밑 과목밭 속에 조그만 집, 그 속에서 가난에 부딪기며 눈물의 생활을 헤가는 불쌍한 누님, 그가 어머님 돌아가신 후에는 외로이 나 한 몸을 믿고, 나 한 몸을 세상에 단 하나로 알아, 먼 곳이나마 자주 다녀가고, 자주 오라고 때때로 보고자 고대고대하는 것을 공부니 사무니 하고 바쁜 탓으로 자주 가지 못하여 고대하다 못하여 아마 무정해졌는게라고 홀로 어머님 생각, 내 생각, 어린 동생 생각을 두루 하

며 울더라는 누님!

아아 그가 나 일본 갔단 말을 듣고 얼마나 울었을까. 일본이 어딘지 알지도 못하고 험하고 무섭고 하여 영영 보지 못할 길을 간 줄로 알고 불쌍한 우리 누님이 얼마나 뼈에 맺히는 울음을 울었으랴.

출발이 급하기도 하였지만 그렇게까지 생각해 주는 누님에 고별도 못하고 와서, 와서도 주소 번지를 몰라 편지 한 장 못 보내고 있으니 궁급해하다 마음이 오죽이나 할까. 아아 물가는 비싸고 시절은 험한데 우리 누님은 지금 어찌나 지내는지…… 힘없이 감은 눈속에 빛 검어지고 얼굴 파리하여 시골 촌부티 박힌 누님의 시름없이 눈물 흘리는 양이 애련히 보이는구나 ……

xvii (原文)

<개벽>(1921. 1. 1 제 7 호)의 ‘달밤에 고국을 그리워하며’는 소파가 생전 처음으로 낫선 일본 땅에 가서 겪은 향수병鄉愁病을 엮은 글이다. 추석 다음 다음 날에 썼으니 양력으로는 9 월 28 일이다. 10 여 일 전에 왔더니 9 월 중순에 당도하여 여관에 머물고 있었다. 음력 8 월 17 일의 휘영청 밝은 달이 소파의センチ멘털을 한껏 돋군 듯하다. 와세다早稻田에 있는 여관에 든 소파는 잠을 이루지 못하고 주변의 길거리로 들뜬연병장으로 배회하면서 하염없이 눈물짓는다. 소파의 가슴을 아프게 파고드는 감회는 그의 본가 가족들 사정이었다.

소파가 결혼한 것은 1917 年 4 月 8 일이다. 지지리도 가난한 가정형편에 총독부 토지조사국 사자생으로 있으면서 제대로 먹지 못해 피골이 상접해 있던 그가 손병희의 사위가 된 후 날로 몸이 불고 신수는 흰해졌다. 천도교와 보성전문학교를 배경으로 그의 재능은 일진월보 유감없이 발휘되어 글을 쓰고 청년을 모으고 잡지를 발행하고 그의 활동은 빛을 발한다. 3.1 독립운동에서 그는 단단히 한 몫을 했다. 신문화주의 운동에 젊은 기수로 앞장서 민족의 각성을 소리 높여 외쳤다.

그리고 다정하고 지성적인 신여성과 사랑도 나누었다.

고국을 훌쩍 떠나 객창에 머물며 추석 명절을 보내고 밝은 달을 바라보면 누구나 고향과 가족이 생각나는 것이 인지상정이겠지만 소파의 가슴 깊은 곳에서 솟는 눈물은 보다 원초적인 슬픔에서였다. 이 글에서 소파의 아내와 자녀들에 대한 감회는 전혀 언급되지 않는다. 가난에 시달린 본가 가족에 대한 뿌리깊은 애절함뿐이다.

소파의 어머니는 원래 병약한 몸으로 그동안 약 한번 제대로 쓰지 못하고 오래 몸져누워 지내다가 아들 결혼 후 한 달도 채 안된 5월 6일에 작고했다. 소파 아래로 어린 여동생 둘을 남겨둔 채 소파의 가슴이 얼마나 아렸을까. 그보다 먼저 소파가 열 살 때 누나가 열두 살의 어린 나이로 입하나 줄이기 위해 시집을 갔다. 뒤돌아보며 떠나는 누나 몰래 먼발치에 숨어서 ping ping 쏜은 눈물의 기억은 아직도 그의 가슴에 깊은 상처로 남아 있었다. 돌아가신 어머니와 시집가서 고생하는 누님을 생각하면 어느 때든지 견잡을 수 없이 그의 눈물샘은 솟구치고 넘쳐 흘렀다.

xviii (原文)

소파의 이야기는 어떤 명배우 못지않는 표현연기로 청중을 사로잡았다는 것이 그의 동화를 들은 사람들의 한결같은 평이다. 그는 이야기를 하면서 슬픈 대목에 이르면 자신도 눈물을 줄줄 흘리면서 청중을 울린다. 어떻게 실감나게 진짜 눈물을 그렇게 흘릴 수 있는지. 흔히 이름난 명 연기자들이 안약을 사용하지 않고 눈물을 흘릴 때는 자신의 슬픈 경험을 떠올리면서 운다고 하지만 소파는 “어머니!” 말만 해도 눈물이 나오는 사람이었다.

객지의 달밤에 여관을 빠져 나와 헤매면서 소파는 새삼스럽게 그의 본가 식구들의 고생스러움을 되새기고 있었다. 결혼 후 우리나라 법도대로라면 신부 용화가 방씨네 시댁으로 들어가야 한다. 더욱이 소파는 장남이고

장손이다. 그러나 처가에서 살게 된 데에는 장모 홍씨 부인의 주장이 통하기도 했으나 사직동 도정궁 앞 짜부라진 초가집엔 식구가 많아서 신부를 맞을 방도 없었다. 어쩔 수 없는 현실 때문에 소파는 처가살이를 하게 되었고 그 덕분에 육신은 편안해졌지만 마음 한구석엔 본가의 가난이 무거운 짐으로 남아 있었다.

언제인지 모르나 소파의 본가는 서대문 홍파동으로 옮겼다. 아버지 경수는 재혼을 했고 줄줄이 또 딸만 셋을 얻었다. 아들은 귀한 집안인가보다. 아들 노릇 제대로 못하고 동생들 거두지 못한 소파이기에 객창의 센티멘털은 피맺히는 자괴지심이기도 하였다. 그러나 소파는 가난의 슬픔에 주저앉을 수는 없었다. 해야 할 일이 너무나도 많았다.